

Impact of Flow Cytometry Crossmatch B-Cell Positivity on Living Renal Transplantation

栗原, 啓

<https://hdl.handle.net/2324/1398541>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

氏名・(本籍・国籍)	くりはら けい 栗原 啓 (福岡県)
学位の種類	博士 (医学)
学位記番号	医博甲第2652号
学位授与の日付	平成25年12月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 医学系学府 医学専攻
学位論文題目	Impact of Flow Cytometry Crossmatch B-Cell Positivity on Living Renal Transplantation (生体腎移植におけるフローサイトメトリッククロスマッチB細胞陽性症例の意義)
論文調査委員	(主査) 教授 内藤 誠 二 (副査) 教授 赤司 浩 一 教授 吉開 泰 信

論 文 内 容 の 要 旨

背景：フローサイトメトリッククロスマッチ (FCXM) T cell 陽性症例の腎移植成績に関してはこれまで様々な報告がなされている。これらの報告では FCXM T 陽性症例は移植予後が不良であることが示されてきた。近年は、免疫学的なリスクの高い移植において Rituximab・血漿交換・グロブリン療法により良好な成績が得られるとの報告もみられる。一方で B cell 陽性症例に関して一定の見解はないのが現状である。今回、生体腎移植における B cell 陽性の意義を明らかにするために、FCXM B cell 陽性群と陰性群における拒絶反応および生着率を比較検討した。

対象・方法：2007年4月から2012年6月までに実施した生体腎移植のうち解析可能であった146例を対象とし、B cell 陽性 (BCXM (+) n=31) 群と B cell 陰性 (BCXM (-) n=115) 群の2群に分けた。2群間での生存率、生着率、拒絶反応を3期 (0~3ヶ月、3ヶ月~1年、1年~2年) に分けて比較した。拒絶反応に関係する危険因子を特定するためにステップワイズ法を用いた重回帰分析を行った。

結果：移植後1年までの生存、生着率は両群共に100%であった。2年以内の拒絶発症率はBCXM(-)で16.8%であった。一方、BCXM(+)では33.2%であったが、拒絶発症率は両群間に有意差は認めなかった(P=.201移植後2年まで)。感染症発症率にも差は認めなかった。感作歴のみが危険因子となった。結論：BCXM(+)群は拒絶が多い傾向があったが、生存、生着率に影響はなかった。また本検討では拒絶反応に対する既存抗体の関与が示唆されたものの統計学的有意差は認められなかった。今後、FCXM B cell 陽性の臨床的意義をより明確にするため長期間の観察が必要である。

論文審査の結果の要旨

背景：フローサイトメトリッククロスマッチ(FCXM)T cell 陽性症例の腎移植成績に関してはこれまで様々な報告がなされている。これらの報告ではFCXM T 陽性症例は移植予後が不良であることが示されてきた。近年は、免疫学的なリスクの高い移植において Rituximab・血漿交換・グロブリン療法により良好な成績が得られるとの報告もみられる。一方で B Cell 陽性症例に関して一定の見解はないのが現状である。今回、生体腎移植における B cell 陽性の意義を明らかにするために、FCXM B cell 陽性群と陰性群における拒絶反応および生着率を比較検討した。

対象・方法：2007年4月から2012年6月までに実施した生体腎移植のうち解析可能であった146例を対象とし、B cell 陽性(BCXM(+))n=31群とB cell 陰性(BCXM(-))n=115群の2群に分けた。2群間での生存率、生着率、拒絶反応を3期(0~3ヶ月、3ヶ月~1年、1年~2年)に分けて比較した。拒絶反応に関係する危険因子を特定するためにステップワイズ法を用いた重回帰分析を行った。

結果：移植後1年までの生存、生着率は両群共に100%であった。2年以内の拒絶発症率はBCXM(-)で16.8%であった。一方、BCXM(+)では33.2%であったが、拒絶発症率は両群間に有意差は認めなかった(P=.201移植後2年まで)。感染症発症率にも差は認めなかった。感作歴のみが危険因子となった。

結論：BCXM(+)群は拒絶が多い傾向にあったが、生存、生着率に影響はなかった。また本検討では拒絶反応に対する既存抗体の関与が示唆されたものの統計学的有意差は認められなかった。今後、FCXM B cell 陽性の臨床的意義をより明確にするため長期間の観察が必要である。

以上の成績はこの方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験は、まず論文の研究目的、方法、研究結果などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったがいずれについても適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。